編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）
〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第 53 号

大阪市史料調査会（編集）
大阪市立中央図書館内　TEL06-6539-3333

●大阪の脱線電車店頭に突入す

昨今は自動車が店舗に突っ込む事故が報道されることもありますが、道路を市電が走っていた頃は市電も店舗に突っ込むことがありました。

写真は、『歴史写真帳』（大正 14 年 1 月 1 日発行、「歴史写真　第 138 号」に掲載されているもので、ＣＨＩＨＡＹＡ　ＳＨＯＫＡＩの店舗に市電が突っ込んでいることがわかります。この掲載写真の言葉書きには次のようにあります。

（前文略）写真に示したのは十一月二十三日午後十一時頃、大阪市電の三〇八号電車が四ツ橋より大国町に向ふ途中西区北堀江通一丁目に於て脱線し約十五、六間を辷（すべ）り出し機械貿易商千早商会の店頭目蒐（めが）けて突入、大陳列窓を散々に破壊したる有様であるが、恰（あたか）も夜更けで人通り少く幸いにして負傷者は出さなかった。

とのことです。

この事故は『大阪朝日新聞』大正 13 年（1924）11 月 25 日紙上に記事が掲載されています。

飛ばし過ぎたのか　軌道が悪いのか　市電の屋内闖入と賠償

大阪市電のカラ車が二十三日深更南北線の北堀江上通一丁目を南へ疾走中脱線して、機械貿易商千早商会に突入（朝刊一部所報）したについて角電気局長、清水工務部長、木村運輸課長等は二十四日早朝から交々千早商会へ見舞に出かけ損害数千円を賠償することに決定した、脱線突入の原因は乗務員側の過失にあるか、又は軌条、車輛の技術方面にあるかについて運輸課側は『勿論軌道が悪いからだ、脱線した箇所約二メートルは内側レールが著しく磨滅してゐる上に次のレールの接目が高くなってゐるために軽いカラ車が飛び上がって脱線したものである、速力も脱線当時は十哩（マイル）で走ってゐたか、十五哩までは変はないので制限内の高速度を出して脱線するやうなレールなら乗務員も乗客も安心して乗れない、幸

ひ夜でよかったが白昼なら乗客と商会から多数怪我人を出したことだらう』といひ、工務課側では『決してレールや、車輌が悪いからではない、単車のしかもカラ車を停留所一つ飛ばして無暗(むやみ)に走らせたために軽い電車がヒドくあふられて脱線したものだ、内側レールが磨滅してゐたために脱線したといふが、元来内側レールは脱線を防ぐためのものでなく単に敷石の都合上本レールと一緒に造ってあるもので現に築港線などは内側レールはない、カーヴの箇所ならとにかく直線のところでは決してあんな脱線なんか技術上やり得るものでなく、大正三年頃大阪市電がボロ電の絶頂に達してゐた時などもっとこんな事故がある筈だったのが無かったのを見ても分る』と互いに責任の転嫁比べを始めてゐる、南北線（梅田－四ツ橋－湊町－難波間）は大阪市電全線の内で最も悪い状態にあることは市電当局も認めて居り肥後橋信濃橋間は明年二月までに、信濃橋四ツ橋間は十四年度に、四ツ橋から事故を起こした箇所を通って湊町の深里橋までは十五年度にいづれもレールを取替へることになってゐたもので、市電では今回の事故に鑑み軌道の敷石を全廃してソリッツデイシット舗装に代へ、敷石から来るレールの破損。車輌のいたみを防ぐ計画を進め来年度から着手することにしてゐると

記事では市電の時速は 10 哩から 15 哩というから時速 30km も出ていないことになります。現在の電車と比べると、スピードが出ていない感じがしますが、道路上を走る軌道車はこのぐらいなのかなと思います。事故は第 2 期線の南北線（梅田停車場前～恵美須町 2 丁目）の北堀江 2 丁目駅を過ぎ南進していた所で起きたようです。市電に突っ込まれた千早商会とは、大正 12 年に朝日新聞社が千早商会を通じてイタリアからサヴォイヤ S-13 という飛行機を買っています。記事では機械貿易商とありますので、間違いないと思います。

大阪市電は昭和 44 年（1969）に全線廃止されましたが、私はかろうじて子どもの頃に乗った記憶があります。また、住んでいた所の関係で阪堺電車（阪堺電気軌道）にはいつも乗っていました。でも路面電車が脱線してお店に突っ込む等ということがあったとは知りませんでした。写真を見ますと、大正 13 年当時の男性は和装に帽子という姿が多いですね。夜も遅い時間ですが帽子を被るのが当たり前だったのでしょうかね。（尾﨑安啓）

●大阪落語の始祖　米澤彦八

令和初の「彦八まつり」が、８月３１日と９月１日の両日、上方落語協会の主催により生國魂神社境内で、盛況の裡に催されました（実行委員長は桂文福師）。今年で２９回目をむかえるこのイベントは、「落語家の文化祭＆ファン感謝 DAY」として、「年に一度、上方落語家が一堂に会し、上方落語ファンをはじめ、一般の方々と交流を深め、大阪の伝統芸能として身近な上方落語を広くアピールし、その更なる発展と後世への継承を目的」（上方落語協会ＨＰより）としています。平成２年（1990）、境内に『彦八の碑』が建立されたのをきっかけに、翌年から《落語家おもしろ屋台》《種々の芸能の奉納》が開催されています。ここで登場する「彦八」とはどんな人だったのでしょう。

■彦八まつりでの一コマ。西川梅十三(にしかわうめとみ)踊り教室おさらい会の奉納舞踊（撮影：やまだりよこ）。

大阪落語の始祖(しそ)・米澤彦八(よねざわひこはち)（初代）は、江戸時代中期に活躍した人物で、大衆娯楽としての落語を初めて演じたといわれています。当初、

大道に床几を置いて坐り、通行人を呼び止めて辻咄を演じていました。やがて生國魂神社境内の小屋に出演。「当世仕方物真似」として木戸銭をとるようになります。彦八の芸風は、立烏帽子や大黒頭巾といった小道具を用い、大名の物真似が得意であったといわれます。コミカルに囃し立てながら、即興で役を演じる大阪二輪加の原型と考えられます。大いに人気を博し、正徳４年（1714）には名古屋の興行主に招かれ、巡業を行うこととなります。彦八は喜び勇んで向かったものの、巡業先で客死してしまいます。ちなみに彼の死から２０年余り経った頃、京都に２代目 米澤彦八が登場します。

■『御入部伽羅女』より生國魂神社境内の寄席小屋の様子。画面左より３つ目に「当世しかた物まね（仕方物真似）よねさわ（米澤）彦八」とある。

この米澤彦八に最初に注目したのは誰でしょう。最初かどうかは定かではありませんが、昭和５年（1930）に出版された『郷土趣味　大阪人』という雑誌に「大阪落語の元祖」と題された一文があります。この雑誌は浄瑠璃研究家として名高い木谷蓬吟が編集発行を務め、日本画家で妻君の木谷千種が表紙画を描きました。文章は雑誌の企画として開催された落語会に因んで寄せられたもので、筆者は後に雑誌『上方』を刊行することとなる郷土史家　南木芳太郎（号は萍水）。彼は「大阪で落語の種を蒔いたのは一体誰であるのか、この元祖の事は今日まで殆ど等閑に附せられている、恐らく今日の落語家諸君も御承知はあるまいし、世間でも余り認識して居らないようだ」と嘆き、その元祖として米澤彦八を取り上げ、彼の事跡、芸風、具体的なネタについて紹介した上で、「今後とも滅び行く大阪落語の保護や研究の意味で時々催されん事を希望」し、大阪落語（ひいては大阪言葉そのもの）の保存を訴えた。「格別大阪言葉の廃滅を歎く訳でもでないが郷土趣味として純粋の大阪言葉を包含する大阪落語を保存する意味から、後援会でも造って見てはどうか、而して出来る事なら初代米澤彦八の伝記などもはっきりさせて、歿年月などが幸に判然とされるならば、年に一回、盛大な彦八忌でも営んで影が薄くなり行く大阪落語の為めに大に気を吐いて見てはどうだっしゃろかと、これは落語家諸君に敢て提唱する」と結んでいる。

落語を通じて、大阪言葉の保存、大阪の郷土芸能・文化の保存。そのために今一度、歴史を振り返り顕彰することで、時代の流れと共に薄れゆく大阪特有の地域性を守ろうとする思い。彼の意思と行動が今日の「彦八まつり」にも受け継がれているともいえるのです。　　（古川武志）

●大阪城石垣のふるさと

現在、外国人観光客など多くの人々で賑わう大阪城は、豊臣秀吉が統一政権の本拠地として築造し、豊臣家の滅亡後の元和６年（1620）よりおよそ 10 年間をかけて、江戸幕府（徳川家）が再築して現在に至っています。現存する徳川期の大阪城は、幅広く深い堀や天を仰ぐように高い石垣に囲まれた、豊臣期を上回る実質を備えた大城郭です。とくに石垣の規模は江戸城をもしのぎ、高さは最高で 32 mもあります。17 世記に築かれた世界の石造建築のなかでも屈指の規模でしよう。

さて、この大阪城の石垣には、100 万個を優に超える、多量の石材が使用されています。これ

■甲山森林公園の刻印石

らの石材は、いったいどこから供給されたのでしょうか。大阪城石垣の石材は、東は笠置や生駒山西麓、西は九州の沓尾・谷口を範囲とする、西日本の各地から調達されました。おもに瀬戸内海の島嶼（小豆島・塩飽諸島など）と東六甲山系（表六甲）の山麓部から採取され、大阪まで船で運ばれました。このうち東六甲山系は、現在の神戸市御影・芦屋市・西宮市にまたがる六甲山の東側に連なる地域です。この地域から、石垣用石材の半数近くが調達されたものと推測されています。石材の大半は六甲花崗岩の築石です。石垣を高く積み上げるため、ほぼ同じ大きさに整形・規格化されています。現在、東六甲山系では、大阪城の普請にかかわる石切丁場（採石場）の跡が複数確認されています。これらの遺構は「徳川大坂城東六甲採石場」と総称されています。

その一つである「甲山刻印群」（兵庫県西宮市）は、兵庫県立甲山森林公園の中に分布しています。豊かな自然を楽しみながら公園内を散歩すると、あちらこちらに露出した岩が目に留まります。石を割り取るためにクサビ状の穴（矢穴）をミシン目のように連続して穿ったものや、石材が割り取られて現地に残された母岩、長方形に荒く加工された石材など、石材の採取・加工の段階を示す石が点在しています。これらは大阪城再築のための石材を採取・加工した跡です。作業場の目印にした刻印のある石もいくつかあります。その刻印から、この石切丁場を担当した大名は佐賀の鍋島氏であることがわかります。幕府は大名たちに、石材の採取から石垣の普請までを分担させました。

平成 30 年（2018）２月、「甲山刻印群」を含む東六甲採石場は、小豆島石丁場跡に加える形で、国史跡に指定されました。人びとがどのようにして石を割り、加工して、大阪まで運び、壮大な石垣を築いていったのか。いにしえに思いを馳せながら、甲山森林公園を散歩してみてはいかがでしょうか。

（中村直人）

★大阪市史編纂所では、ホームページを開設し市域の歴史に関する情報を発信しています。
https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871　または「大阪市史」で検索してください。
今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、催し物や刊行物を紹介する「おしらせ」、「みんなの質問」では、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問と回答を掲載しています。
また、この「編纂所だより」のカラー版の閲覧とダウンロードも、上記ホームページより可能です。

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（市立中央図書館３階市史編纂所内・電話 06-6539-3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店：ジュンク堂書店（大阪本店・難波店）
紀伊國屋書店（梅田本店　※『大阪の歴史』最新号のみ取扱い）

「編纂所だより」は３月と９月の年２回発行し、大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています（数に限りがあります）。大阪市立中央図書館（３階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。
（令和元年９月）